

# 2014 衆院選 高齢者医療に足りぬもの

## 行き場なき人たち 安心できる最期へ 選択肢増す努力を

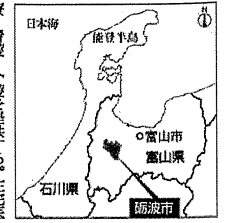
たゞさんには平凡でも、生活を1冊の本を編むようなもの。その機嫌をものすけ直せるかに関心が高まるなか、富山県砺波市の医師・佐藤伸彦さんは、病弱でも在宅でもない終末期の場を試みてきた。これまでの医療をどうした根拠をどうか。高齢者は「多死時代」を迎え、医療費は、そして国は何かをすべきなのだろう。

「日常の隅々、重なる洋間」に80代の女性が眠っている。話しかけても顔に腫れも戻らない。チエリッポの球根の産地で知られる人口約5万の砺波市。その中心部は、平屋建て15の個室を備えた、ものごたりの「お」がある。入居しているのは、重い病を患った高齢者。ここで人生最後の時を過ごす。

佐藤さんが理事長を務める医療法人社団「ナラティブホーム」は、在宅医療に力を入れている。医療・看護・介護のスタッフもものごたりの郷を訪問し、患者を引き取る手がかわる。

「いづれ、構想してはいたのですが、制度上は数ヶ月もはたせば、質の高い在宅医療が実現する。所有者が別、私たちが病院に勤務しているわけではない。在宅医療に力を入れているのは、医療費削減が目的ではない。高齢者が安心して暮らすために、在宅医療の手立てをどうするか。在宅医療に力を入れているのは、医療費削減が目的ではない。高齢者が安心して暮らすために、在宅医療の手立てをどうするか。在宅医療に力を入れているのは、医療費削減が目的ではない。高齢者が安心して暮らすために、在宅医療の手立てをどうするか。」

「在宅医療に力を入れているのは、医療費削減が目的ではない。高齢者が安心して暮らすために、在宅医療の手立てをどうするか。在宅医療に力を入れているのは、医療費削減が目的ではない。高齢者が安心して暮らすために、在宅医療の手立てをどうするか。在宅医療に力を入れているのは、医療費削減が目的ではない。高齢者が安心して暮らすために、在宅医療の手立てをどうするか。」



**在宅医療と在宅死**  
医療関係者が自宅で暮らし続ける人々を支えるのが在宅医療で、厚生労働省は整備を進めている。入院期間をできるだけ短くし、医療費抑制を図る側面もある。自宅で最期を迎える人は1960年ごろまで70%以上いた。しかし、その数は76年に医療機関と逆転し、昨年には約13%。一方、08年の厚生省の調査によると、最期までなるべく自宅で過ごしたいと望む人は「必要になれば医療機関などを利用」を含め63%だった。

### 新たな終末期医療を唱える医師 佐藤伸彦さん

1958年生まれ。市立砺波総合病院などを経て、2010年から現職。「ものがたり診療所」所長。来年2月に「ナラティブホームの物語」刊行予定。



「無料でよろず相談の外來もやっています。やりがい、ありますよ。」—富山県砺波市、山本和生撮影



## 個が消えた医療 語れぬ人の尊さ 最終章に寄り添う

「自分が見えなくなると、自分もなくなり、真実勝負です。これからは、医療から逃げたいという話です。」  
—現代医療への疑問を語りつづける

「在宅医療に力を入れているのは、医療費削減が目的ではない。高齢者が安心して暮らすために、在宅医療の手立てをどうするか。在宅医療に力を入れているのは、医療費削減が目的ではない。高齢者が安心して暮らすために、在宅医療の手立てをどうするか。」

「在宅医療に力を入れているのは、医療費削減が目的ではない。高齢者が安心して暮らすために、在宅医療の手立てをどうするか。在宅医療に力を入れているのは、医療費削減が目的ではない。高齢者が安心して暮らすために、在宅医療の手立てをどうするか。」

「在宅医療に力を入れているのは、医療費削減が目的ではない。高齢者が安心して暮らすために、在宅医療の手立てをどうするか。在宅医療に力を入れているのは、医療費削減が目的ではない。高齢者が安心して暮らすために、在宅医療の手立てをどうするか。」